

千いにしえに染める
古の色

久保田 香里
紫昏たう・絵

Alienkan

十六章	羽衣	はごろも	(桐)	204
十五章	松	まつ		190
十四章	白菊	しらぎく		177
十三章	蘇芳	すおう	(紅梅)	163
十二章	薄	すすき		150
十一章	月草	つきくさ		138
十章	桔梗	ききょう		122
九章	蓮	はす		113
八章	朽葉	くちは		101
七章	雪	ゆき		86
六章	朝顔	あさがお		72
五章	姫百合	ひめゆり		61
四章	紫苑	しおん		47
三章	女郎花	おみなえし		35
二章	山吹	やまぶき		24
一章	卯の花	うのはな		15
序章	撫子	なでしこ		11

Alice kan

かさねの色目
 布の表地と裏地で色の重ね方を
 変えたり、着物を着る際、布の
 上下で色の重ね方を変えて楽し
 む、平安時代の配色法。

右近

藤原経任

小鈴

藤原千古





帷台

ひし 廂

すのこ 養子 (濡縁)

わたの 渡殿

千に染める
古の色

AliceKan

序章 撫子 なでしこ

運びこまれたたくさんさんの布地が、姫君ひめぎみのまわりにひろげられた。

目のさめるような紅くまじ、すすしげな青あお、きよらかな紫むらさき――。

さまざまな色があふれる。

絹の織り目はこまかくなめらかで、光をうけてかがやく。

手にとればつめたい。ゆびにうでにまといつき、するすると流れるような音をたてる。

女童めしご（召使めしつかいの女の子）がいちまいとりあげて、姫君の肩かたぐちにあてる。桃ももの花の色よりも赤みのつよいあかるい薄紅うすくまじいろ色が、若やかな姫君によく似合う。

背丈せたけは母と変わらないくらいになった。手も足もすらりとのびて、もうあどけない

子どもとはいえない。

けれども、じきにおとななのだといわれると、とまどう。

女童はあかるくいう。

「とてもお似合いです、姫さま。これにあわい紫をかさねて、撫子の襲はいかがでしよう」

撫子の花の色は、すこし紫がかつた薄紅色をしている。

花や自然のうつりかわりを、いくつもの色であらわしてたのしむのを、かさねの色目という。

あらわしかたは、いくつもある。

ふたえになった衣の、表と裏の色をかえる。裏地を表にすこし見えるように縫いあげる。生地うすぢの薄さを生かして、かさねた色をすかして見せる。

かさね着した衣の長さをすこしすつかえて、すそやそで口、えりもとに、いくつもの色が見えるようにする。

色の組み合わせかたも、ひとつだけではない。

撫子の襲なら、濃い紅から薄紅へ順にかさねたり、白をいれて夏らしくしたり、紅

を濃くして、葉の緑色をいれたり。

時により場面により、着るひとにより工夫する。そのときどき、それぞれの思いをこめてかさねる。

「庭の撫子も、いま花ざかりです」

女童のはずんだ声に、姫君はやわらかな笑みをかえす。

✦

この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば

(この世の中は、自分のためにある世だと思ふ。この満月がすこしも欠けたところがないように、自分にもなんの不満もないことを思うと)

平安時代、権勢をきわめた藤原道長が、このようにうたつたころのこと。おなじく京の都に、小野宮の右大臣とよばれるひとがいた。名を藤原実資という。祖父より受けついで小野宮という邸宅のほか、数多くの莊園や牧などをもっていた。

伝統や作法にくわしく、すぐれた公卿として、賢人右府（右府は右大臣のこと）と称された。また、権力に安易におもねることなく、朝廷を重んじ筋をとおした。そのため道長も、実資には敬意を払っていたという。

書き残された日記は、小野宮の右大臣の日記「小右記」とよばれる。「この世をば」のうたは、この日記に書かれ、後世に伝わることになった。

さて、小野宮の右大臣には、かぐや姫（ひかりかがやく姫）とよばれる娘がいた。おそくに生まれたこの姫君を、右大臣は掌中の玉のように、いつくしみ育てていた。

姫君の名を、千古という。

物語のはじまりは、治安三年（一〇三年）、千古十三歳の夏――。

一章 卯の花 うのはな

琴の音が聞こえている。

小野宮に数ある建物の、中心となる寝殿、その東にむいた廂から。

くせないまっすぐな音色だ。

坪庭に面した御簾はまきあげられて、廂にあかるい光がおどっている。風がとおり、几帳にかけられた白と紫のうすぎぬが、おおきくなびいた。

箏の琴をひく姫君のすがたが、あらわになる。

気どらない相（内着）すがたは、薄紅とあわい紫をかさねた撫子の襲のよそおいで、ほおに髪がかかるのかまわず、いっしんにひいている。

頭はかたちよくまるく、つややかな黒髪が肩にひろがっている。そでからのぞく指